

基調講演

ロータリー 100年に向かって

ロータリー財団元トラスティー
R.I.元理事
R.I.2004年国際大会委員長

千 玄 室



どうもありがとうございます。皆様方には今日もお忙しいのに、あいかわらず、I.M.やロータリーのいろいろな催しにお出ましをいただきますことを、ロータリーのためと私はありがたく存じている次第です。今日は福井ガバナー、パストガバナーの皆様方、なお寿栄松・吉村ガバナー補佐、またモーニングロータリークラブが創立5周年を終えられたばかりですが、このホストクラブをお受けいただいて、そして素晴らしいこのインターシティミーティングが催されますことを私ども、嬉しく思っております。

この2650地区は非常に歴史的にも古く、クラブ数も地区としては非常に大勢のメンバーを抱える地区でございます。1府3県ですからこのインターシティミーティングも第1組・第2組・第3組・第4組と分割して行われます。また、ゼネラルリーダーの方もそれだけたいへんだと存じております。山田ゼネラルリーダーがこの私ども3組の担当をお引き受けいただいて、モーニングロータリークラブと一緒にいろいろ準備をさせていただきまして、たいへん嬉しく存じております。むちゃくちゃにならないように、お呈茶席もちゃんと設けており、皆様方一服いただいてそして心を落ち着けて、このインターシ

ティミーティングに参加をしていただくというのが、実は仕組みでございます。まだ召し上がってらっしゃらない方は、どうぞ休憩中に一服召し上がっていただいたら、たいへんありがたく存ずる次第です。私は茶人ですので、お茶の話は自分自身で長い長い自分の経験、そしていろんな面との結びつきというような事で、得意のお話ができるのですが、ロータリーというものにつきましても、なかなかその実体というもの把握できておりません。ロータリーのテーマは1年ごとに変わっていきます。会長に当選しますと、必ずテーマいわゆるターゲットを会長が作らねばならないというのが、この定款にもしております。必ずしも作らなければいけないというわけでもないのですが、これが慣例になっているのです。昨年のピチャイ・ラタクル直前会長は、タイ国から出られた非常に敬虔な仏教徒であり、政治家であり経済人また文化人でもあります。ピチャイ・ラタクルさんは、昔からお茶がお好きで、タイ国の裏千家の協会の会長を長く務めていただいている方であり、たいへんお茶の心はご自身でよく体得していらっしゃいます。いろんな場合にお茶の精神をひきだいでい出され、お話をしておられたということはたいへん嬉しく思っていました。そのピチャイ・ラタクルさんが、1年間さんざん皆様方の脳裏にお刻みになりましたように「慈愛の種をまこう」と、本当に慈しみの種をまいていこうというテーマをあげられました。ロータリーというものを通じて皆様方の職業、そしてその職業を通じて少しでも他の方のためになるように潤いのある種をまいて、そしてそれを育てていこう、それはすなわち奉仕というものに他ならない、ということなのです。その後を受け継がれたのが、ジョナサン B. マジアベ会長です。たまたま私と理事と一緒に務めた方で、国際ロータリーでは黒人の方が会長をされたのは、この98年の歴史の中でも初めてです。アフリカのナイジェリアの出身でしかも英国で教育を受けられ、素晴らしい知識と知恵を身につけられたジェントルマンです。2年間一緒に理事を務めていたとき、実はよく話し合いをしており、なんと素晴らしい思いやりのある

人であろうかと感じました。先ほども福井ガバナーがお話をされましたように、残念ながら昨年奥様が倒れられました。その時たまたまブリスベンで大会が終了し、私達は2004年の世界大会、いわゆる国際大会についての会議を朝の8時から始めようと会議場に集まり、ジョナサン会長が来られるのを待っていたのです。非常にいつもと違った様子で入ってこられましたので不思議だなあと感じていました。すると「実は、申し訳ない。家内が危篤になった」と言われたのです。奥様が英国の病院に入院されているので、すべての予定をキャンセルしてこれからすぐにロンドンに向かわなければならないというお話でした。いよいよジョナサンの年度が始まるというその矢先に奥様を亡くしになるとは、なんとお気の毒なことだと思いました。私も同じように家内を亡くし、もう5年も経ちますが、その心の痛手はいまだに残ったままです。ジョナサンが覚悟をされて行かれたその後、事務局の人達から「実は奥様がお亡くなりになったのです。それを危篤ということでジョナサン会長は急遽飛行機に乗られたのです。そういう次第ですから」ということを聞きました。誠にけなげな心遣いをされましたので、ご冥福を祈ることよりも我々はこの1年間の会長という激職・重職にほんとうに耐えていただけるように、心からお祈りをしたような次第です。

いよいよ2004年の国際大会も間近にせまって参りました。これにつきましては、後ほど小林事務総長補佐の方から皆様方にいろいろとご協力をお願いしたいということで、お話をする機会を与えていただきますことを委員長として御礼を申し上げます。

先ほどもこのインターシティミーティングが始まる前にパストガバナーの皆様方にお集まりいただき、諮問委員会を行いました。諮問委員会は、ガバナーが地区内でこれからなさろうとすること、あるいは自分の考えを先輩のパストガバナーに聞いていただいて、そしていろいろご意見を承り、それをもとにしてこの1年間の自分の行動・活動の糧にしていこうという、たいへん重要な第1回の会合です。そんな会合でいろいろなことが決まりました。いつもなら来年の4月に地区大会が開催されるのですが来年の5月には国際大会が行われますので、4月に地区大会をしますと、たいへん忙しくなります。そこで4地区ではなるべく今年中に地区大会をやっておこうということになり、福井ガバナーは11月に地区大会を開催すると決定されました。そしてまた、次のガバナーの時には5月に国際大会があります。その後、様々なことがたくさんあります。地区大会をどのようにするかということで、ガバナーエレクトもいろいろな意味で構想を練っていらっしゃいます。また、来年の国際大会が終わりますと、国際ロータリーは100周年です。次の2005年5月にシカゴで100

周年をお祝いすることを兼ねての国際大会が開催されます。2005年2月23日が創立100周年です。従って2005年2月23日から6月30日までの間に、各地区そしてクラブにおいては、それに基づいていろいろな催しを行ってお祝いをしてほしいという指令が、もう既にガバナーのもとに参っているはずで、ですから福井ガバナーの年度は国際大会もありますが、それと同時に次の2005～6年度の神谷ガバナーにバトンを渡される時に、100周年のそういったいろいろな催しを完成されますように指導をしていかなければなりません。それはガバナーだけではありません。各クラブも実は本年度の会長さんは次の年度の会長さんに対して100周年の何か催しを一つでも考え、実行するということを目論んでいただかねばなりません。

今日私は、ロータリーの100年を迎えてというように題名を頂戴したのですが、100年を迎えてというよりも、100年を越えたロータリーがいったいどうなるかということについて少しお話を申し上げたいと思います。

ポールハリスが自分でこのロータリーという一つの集まりを創られたときに、ここまで世界的にロータリーというものが発展するという事は、夢にも思っていなかったとご自身の自叙伝の中に書かれています。それは1950年に書かれたものの中に、戦後、日本が国際ロータリーに復帰する準備ができた頃には、世界中にどんどんロータリーというものが宣伝され、エクステンションされてきています。それに対してあるロータリアンがポールハリスに「あなたはこういうことを予測されていましたか?」と質問されました。ポールハリスはそれに対して「いや全然、そんなことは予測もしていませんでした。ほんとうの私の願いはそんなに大きくなることではありません。多くの国々でロータリーが生まれることよりも、ロータリーの精神すなわちロータリーの心というものを持っていただいて、そしてその心を他の方々のために伝えていっていただくことによってその国や地域社会が少しでも平和で向上することを望んでいるだけです」ということをおっしゃいました。ですから、来年・再来年に迎える100年にあたって、ポールハリスは天上からどのような思いでいらっしゃるかと、我々は考えなければなりません。ロータリーという組織は今や国際的に非常に大きな存在価値を持ち、160ヶ国、しかも120万の会員を擁する大きな組織になっています。37,000ものクラブを世界中に持ち、同じバッジをつけたメンバーが120万人もいるのです。この国際的な大組織になったロータリーのほんとうの存在価値というものを、ここで私どもがもう一度考えてみなければならぬのではないのでしょうか。インターシティミーティングは単なる親睦、話し合いの場

ではなく、そうしたいろいろな重要な問題をお互いに忌憚なく話し合うというものです。これが、私は非常に大事だと思います。この地区では従来、ガバナー補佐というものは全くおこななかったものです。そのためにガバナーが一人で全クラブを回り、そして様々な催しを全てガバナーがしておりました。それだけにガバナーもたいへん時間をとられて、地区内のメンバーの方々となかなかお話をするという機会も少なかったのです。どちらかというとガバナーというのは敬遠されており、ガバナーに直接話ができないというような傾向が強かったのです。ところが昨年ガバナー補佐をおくと、ガバナーに言えないことは全部ガバナー補佐が聞かれるようになりました。先ほど、ガバナーについて公式訪問された寿栄松ガバナー補佐と吉村ガバナー補佐が、お陰様でたいへん勉強になりましたとおっしゃっていました。ガバナーよりもガバナー補佐の方が本音を各会員から耳にしているのです。ガバナー補佐というのは、ガバナーの一番の側近です。その側近であるガバナー補佐が、一般の会員の方々のロータリーに対する思いというものが、普段言えないことを聞かれ、そういうことがガバナーに通じていくのです。それによってガバナーは自分の地区内をもう少しこのように改良しなければならない、ああしなければならないというような、思いが出てくるのです。しかし所詮、公式訪問というのは時間が決まっておき、限られた中で行わなければなりません。決して満足すべき結果を得るということではできないのです。国際ロータリーの方では、ガバナーができる限り地区内における会員方の意見を徴集するよにという難しいことを言うのです。意見を徴集するよにと言っても、ガバナーの所に行って「こうでございます」「ああでございます」と言いに行く会員はなかなかおりません。このインターシティミーティングは日本だけではなく、昨年、香港・インドネシア・韓国のインターシティミーティングに私も参加し、いろいろな意味で勉強させていただきました。日本のように、このような一つのスタイルでやっているというのはありません。インターシティミーティングというのは、先ほどから申しておりますように、地区内の心あるメンバーの方々が集まって意見交換をするというのが、一番の主題となっています。日本ではこのやり方が少し違うのです。シンポジウムも、もちろん結構です。限られたわずか2・3時間の間に基調講演や、シンポジウムがあり、どちらかというと、ワンウェイなのです。一方通行で、インターシティミーティングが終わってしまいます。ですから、できる限り私どもの地区内においては新しい試みとして、そういうものを一度止めてしまっ、皆さん方の意見をどんと出していくべきなのです。別にテーマなど決める必要はありません。

ロータリーに関して、皆さんがどのような意見を持っているかということが大切なのです。メンバーには20年・40年のベテラン会員の方もいれば1年・2年の方もいます。そういう方々がみんな混ざっているのです。青年会議所と違って老は老、そしてまた壮は壮、青は青というように年齢も様々です。職業も様々な方々がいます。そういう人達が集まったときに、お互いが勇気を持って自分たちの入っているロータリーを、少しでも良くしようじゃないかと思いをしあうべきなのです。この間、私のクラブで西村大治郎パストガバナーが「エンジョイ オブ ロータリー ロータリーを楽しむためには」ということで、少しお話をされました。その時に「エンジョイ オブ ロータリー」というテーマは、私が理事で出ていた時のヒュー・アーチャというアメリカの会長が、今までのテーマは難しく堅苦しいので、誰もがわかりやすいテーマにしようということで決まったテーマです。ところが、その「エンジョイ オブ ロータリー」を今度は反対にとる人が出てきたのです。アメリカで「今度の会長はロータリーを楽しんだらいいと言っている。定款も、そんな難しいこと言わなくてもいいんじゃないか、とりあえず楽しめばいいんじゃないか。難しいことは言いなさんな」とガバナーに随分せまっていき、ガバナーが閉口したという話があります。もともとアメリカ人というのは自分で作っておいて、自分で文句をつけるのが趣味ですので、そういう意味において「エンジョイ オブ ロータリー」の意味をはき違えてしまったのです。とりあえず自分たちが楽しめばいいんじゃないかというように、奉仕というものがどこかへ行ってしまったわけです。ロータリーはそれでは困るのです。どんなテーマでも構いませんが、我々はこのピンとエンブレムをつけるだけはいけません。ロータリーのメンバーであるというためには、何をするためにロータリーへ入ってきたかということ、まず考えなければなりません。ロータリーは単なる奉仕団体ではありません。よく奉仕だけすればいいと勘違いされるのですが、その奉仕という意味のそこにあるものを皆さん方がクラブの例会やミーティング等、いろいろな所でそういうものを取り上げてディスカッションし、そして納得されたり、また納得しない点は追求していくということが大切なのです。ようするに自分の心の中にロータリーというものが、どのように存在していくかということ、まず知っていただくということが、エンジョイするにしても何をするにしても、私は一番大切だと思います。その心というものを知っていただくということが大切なのです。先ほど掘場パストガバナーの著書を取り上げられて、ゼネラルリーダーがおっしゃった「人の話を聞くな」という本の表題だけを見ると、人の話など聞いても退屈だ、俺の話を聞いて

ておけばいいんだという独善的な印象を受けるかもしれません。しかし読んでみると実際はそうではありません。その「聞く」ということの、価値観を自分で見いだすというのが「心」なのです。ですから耳で聞くのではなく、自分の心で聞くことができるというのはたいへん素晴らしいことです。少し難しい話しになるかもしれませんが、私は僧堂で修行をしたことがあります。もう座禅・座禅・座禅。食べるものも少なく「お前は食べるな」というくらい食糧でした。いっそのこと食べない方がよかったです。しかしお腹はすいています。どうしても食べたい。もったいないものですから、やっぱりそこで嘔みしめるということを覚えました。今までは無我夢中でぱっぱと食べているものでも、いかに嘔みしめるということが大事なのかがわかりました。嘔みしめると、お米ならお米の味が出てくるわけです。たかだかお粥かもしれません。それを嘔みしめることによって「あ～おいしい。お米ってこんな味をしていたのか」と普通に食べるよりも違う味わいを覚えたことがあるのです。また、座禅をしている時は眠たくなります。警策でバンバンと目を覚まさせられ、その時に兄弟子がこう言いました。「目を開けて寝る稽古をし」と。目を開けて眠る、これは難しいことです。目は開いているのです。中味は眠っていても目は開けておけということ。これは、先ほどの人の話を聞くなというのと対照的になるのですが、よく人の話を聞いていると、自分が感銘してすーっとその人のところへ入っていく場合と、ついウトウトしてしまい、何かの拍子に目を覚ます場合があります。その目を覚ました瞬間に、実はそのまま目を開いて聞いておけばいいのですが、たいていがまた開いたとたんに、またすーっと不思議なことに次の睡魔にとりかかれてしまうのです。その睡魔を睡魔とせず、自分の心を開きますと、その人の話も寝ずして聞けるというひとつの特技ができてくるはずなのです。ですが、こういうことは非常に難しいかも知れません。堀場先生の本には書いてなかったと思いますが、そういう意味において心で人の話を味わうことができたときに初めて、ジョナサン B. マジリアベさんのほんとうに素晴らしいターゲット「Lend a Hand 手を貸そう」の意味ももっともっと心に響くのではないのでしょうか。毎年2月の国際協議会がアナハイムで行われます。そこでその年度のガバナーになる方々が教育を受けられるのです。その時に現会長のお話と、次の年度に会長になる方のテーマ発表と同時にテーマに対するいろいろな解説があります。これは聞かなければいけません。一生懸命聞かなければなりません。たいてい英語で言われますが、自分の国の言葉でおっしゃる方もいます。我々は、今はイヤホン付きの通訳がありますから、それで聞いていました。この言

葉というのは非常に面白いものです。語学が如何に得意でもその人のしゃべっておられるその国の人間でない限りは、なかなかその方々の心にまですーっと入っていくということではできません。名通訳でなされていても、それは所詮訳してもらっているんだという気持ちが先にたつものです。どうしても表面的なことしか聞けません。実際はわからなくても、その方の国の言葉をじーっと聞いておきますと、通訳で聞いているよりも、その方の身振り、手振りでその人の中に入っていけるという気がします。私はこれがパストガバナーのおっしゃる、人の話は聞くなということの原点であろうと思います。ですから、やはりそういう所が人間の持つ知識的なレベルの問題にもなるかもしれません。賢いからそれがわかるとか、アホだからわからないという問題ではないと思います。ポールハリスは、自分が作ったロータリーというものの原点は「寛容と忍耐と慈愛」であると言っています。ところが、これはポールハリスが自分で作られた言葉ではないのです。西村大治郎さんがよくおっしゃいますが、バイブルのコリントの信徒への手紙の中に「愛は寛容にして慈悲あり」「愛はねたまず、誇らず、傲らず、非礼を行わず、己の利を求めず、怒らず、耐えること」「神の愛を受け、これを他に及ぼす」「みんなの為に all concern」というのがあります。これはイエス様の言葉ですが、それと同時に我々仏教徒、特に中国の儒教に影響を多くしているものに示されています。孔子が門人の宋さんという人に向かって「私の生涯、ただ一筋の理想で貫かれている」ということをおっしゃいました。これに対して宋さんは「孔子先生は、道は忠恕、すなわち誠実と思ひやりにつきる」と言われました。忠恕というの、忠義の忠、恕は、如の下に心と書きます。これは、辞書にも載っているのですが如の下に心を書くと「許す」という意味になるのです。忠恕の恕は「許す」という意味です。相手の気持ちになるということが「恕」なのです。ですから「忠恕、すなわち誠実と思ひやりにつきる」ということを孔子に教えられたということを考えてみると、イエス様の教えも、孔子様の教えも、いわゆる「寛容」というものを中心にした慈愛が貫かれているということがわかります。ここから、奉仕という理想を地域社会のために、人のために、そしてそれをして差し上げるという精神が生まれてきたといえます。ポールハリスは、つづいて「ロータリーの奉仕は偽善であってはならない、慎まやかに陰徳を積むことである。それは職業を通じて行わなければならない」と言っています。だから、自分の職業というのは天から与えられたボケーションナル (vocational) です。vocational service「職業奉仕」は、天から与えられた自分の職業を通じて奉仕をするということなのです。しかもそれは慎まやかな陰徳を積むということ

に他なりません。一人一人がそれを実行しておれば、この世の中は善意という奉仕の波で世界を覆うことができるであろうということ、1950年にポールハリスは言っているのです。私は、そういうポールハリスの教えをもって、今日までロータリアンとして奉仕の実務に入ってきました。しかし果たして我々は本来の奉仕というものに対してどのような考え方を持っているのかということ、謙虚に反省しなければならぬのではないかと思います。それであれば、101年のスタートはできないのです。今までの100年間のロータリーは、ほんとうに苦しい棘の道もありました。エクステンション、エキテンション、そして様々なプロジェクトを組んで参りました。そういう先輩方のご苦勞、善意の奉仕というものがあってこそ、100年を迎えることができたのです。これから101年めは、私達がそれを作っていくかなければなりません。何を作っていくのでしょうか。今の「寛容・慈愛・忍耐」というこの教えをもって、ほんとうに私達は偽善的でないかどうかを、まず考えていきましょう。ロータリーに入っていると「右向け右、左向け左、前へ進め」これで終わってしまうのです。先ほども言ったように、型だけのロータリーでは、型だけで終わってしまいます。そのロータリーの型に一人一人のロータリアンの血を入れることによって、その型が「カタチ」になるのです。あなたが、あなたの血を入れると、あなたのカタチのロータリーになるのです。ロータリーは変わりません。長嶋さんではありませんが、永遠不滅です。でも私は、永遠不滅のロータリーをもっと活かしていくためには、ロータリーという一つのルール「型」、決まったものの中に自分の血を入れなければならないと思います。それによっていろんな働きができるのです。これからの101年目はお金を使わずに、頭と心と体を使っていくロータリーになっていかねばなりません。もう大きなプロジェクトはいらないのです。後ほど高橋さんがご報告になりますが、ポリオも2000年で一応終結宣言をします。では「次に何をするのか。101年目からは何をするのか」そういうことを言われる方が非常に多いのです。残念ながら現在の国際ロータリーが抱えている問題が財政難です。もう既に800万ドルの赤字なのです。ですから来年の世界大会では800万ドルを減らさなければなりません。そのために青少年問題のプレ・コンベンションを止めなければならないかもしれません。今までやってきたいろんなプロジェクトの中には必要のないプロジェクトもたくさんありました。世界各国からガバナーがどんどんいろんなことを申請するのです。5,000ドルつけてくれ、3,000ドルつけてくれ、というように、要請がすごいのです。そういうものが毎年6,000件くらい世界各国からくるのです。その中から許可されるのは、予算がないためにわずか120件程度です。みんな

な勝手に大義名分をたてて、ロータリーからお金をもらわなければならないのです。わずか1000ドルでもいいんだという、全世界からそういうねらいを持つクラブやディストリックがどれだけあるのでしょうか。その金額をあわせると相当なものになります。ですから、それを整理しなければなりません。そしてロータリーは、そういう派手なプロジェクトばかりに迎合するのではなく、地道にほんとうのロータリーの奉仕というものがどこにあるのかを考えてほしいと思います。ほんとうのロータリーの奉仕とは、心と行動と自分たちにできる範囲で、自分たちの職業を通じ「Lend a Hand」手を貸しあう、お互いに手を握りあう、そして地域社会にできることをやう、ということなのです。一人できないことは、みんなに呼びかけて共にやう、いけばいいのです。クラブから地区へ、地区から全国組織へ、そして全国組織から世界へ呼びかけるのです。そういうことがあってこそ、初めて実行できるものがほんとうの意味において実行できるのです。夢みたいなプロジェクトをたくさん抱えて、そしてお金ばかり集めて、挙げ句の果てに赤字になっていくというロータリーの今の体質はダメだと思います。今の体質をほんとうに見直すということが重要なのです。この見直すということをやって初めて国際ロータリーは存続するのです。101年からのロータリーに向かって、皆様方は勇気をもってロータリーのために真実を語っていただきたい、真実の心を捧げていただきたいということを申し上げて、終わりたいと思います。ご静聴ありがとうございます。